イギリス女性作家の半世紀

2

60年代・女が壊す

現代女性作家研究会
窪田憲子 編

keiso shobo

イギリス女性作家の半世紀

2

60年代

女が撃つ

江苏工业学院图书馆
藏书章

現代女性作家研究会
篠田憲子 編

keiso shobo

60年代・女が壊す　イギリス女性作家の半世紀2

1999年11月25日　第1版第1刷発行

編者　現代女性作家研究会
窪田憲子

発行者　井村寿人

発行所　株式会社　勁草書房

112-0004 東京都文京区後楽2-23-15 振替 00150-2-175253
電話（編集）03-3815-5277（営業）03-3814-6861
FAX 03-3814-6854
大日本法令印刷・和田製本

©KUBOTA Noriko 1999 Printed in Japan
＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。
＊本書の全部または一部の複写・複製・転訳載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

ISBN4-326-89884-4
http://www.keisoshobo.co.jp

刊行のことば

まもなく二一世紀を迎えようとするいま、この歴史的節目に立ち、第二次大戦以降の半世紀を振り返ってみると、ただちに「壊」のひとことが浮かび上がってくる。ふたつの大戦は歴史に類をみない大仕掛けな破壊行為であった。だがそれとは別種の、社会体制をくつがえすほど大規模な「壊」が、大戦が終結した後じわじわと、女／男たちの意識革命から始まっていたといえるのではないだろうか。

わたしたちは何を壊し、何を創ろうとしてきたのか。何を見直し、何をやり直そうとしているのか。イギリス（英語圏）女性作家が文学作品のなかで「問い」、「壊し」、「集い」、「語り」、「拓く」、その多彩な営為を読み解くことにより、それぞれの時代における価値観の推移とその再編成の特徴がおのずと見えてくる。激しく変化してきたこの半世紀を〈女の視点〉から多角的に検証する――それが、このシリーズの目的である。

現代女性作家研究会は、勁草書房の女性編集者の協力を得て、『現代イギリスの女性作家』（一九八六）、ついで『現代イギリス女性作家を読む』全五巻（一九九一－九二）を世に送り出してきた。今回のシリーズに登場する作家は四五人、なかには二巻、三巻にわたって登場するものもいる。まずはゆ

たかな小説世界とその〈読み〉を楽しんでいただき、そして、現代の様々な問題をともに考える機縁となれば幸いである。

一九九九年　盛夏

編　者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

60年代・女が壊す／目次

刊行のことば　i

序　60年代・女が壊す　……窪田　憲子　1

第1章　破壊と創造　……伊藤　節　9
ドリス・レッシング『黄金のノート』

1　ひび割れた意識　11

2　アンナの部屋　14

3　四冊のノートの中身　19

4　「名づけること」と新しいストーリーの創造　31

第2章　見えないかごの中で鳥は羽ばたく　……窪田　憲子　41
マーガレット・ドラブル『夏の鳥かご』

1　自分自身の目、自分自身の声　43

2　解き放つ女　47

3　『ミドルマーチ』の影　50

4　パロディとしてのルイーズの結婚　54

5　セアラの羽ばたき　61

第3章　感性の羅針盤……園城寺康子　71
リン・リード・バンクス『L字型の部屋』

1　住むということ　73
2　罠にはまる　76
3　分裂するジェーン　78
4　私には何でもできる　83
5　広がる家族の定義　88

第4章　六〇年代の〈青髭〉と〈眠れる森の美女〉……田嶋　陽子　95
ペネロピ・モーティマー『パンプキン・イーター』

1　カッコウの子育て　97
2　男に食われる女　108
3　〈女〉になること　113
4　絶海孤島の〈女〉　116

第5章　屋根裏の狂女の復権……山田　晴子　123
ジーン・リース『サルガッソーの広い海』
1　『ジェイン・エア』に向ける反発　125
2　クレオールの狂女たち　127
3　妄想に支配されるロチェスター　132
4　女性を狂気にしたのはだれか　138
5　クレオールの狂女の復権　141
第6章　「腐った根」を探す人々……鈴木　和子　147
バーニス・ルーベンス『いがみあい』
1　子は父の悪を負うか　149
2　犠牲者、グラディス　152
3　迫害者、グラディス　158
4　神経症的な迫害　163
第7章　「あいるらんどのやうな田舎」……太田　良子　169
エドナ・オブライエン『カントリー・ガール』

1 「カントリー・ガール」 171
2 「ニュー・ガール」 180
3 「スカーレット・ガール」 184

第8章 不倫と歳月 ……武井 誠子 197
エリザベス・ジェイン・ハワード『ジュリアスにならって』
1 二〇年前に 199
2 なぜ来たのか 202
3 エマの結婚 206
4 エズメ花を燃やす 209
5 なぜ今ジュリアスを 214

第9章 若き女性芸術家同士の葛藤 ……岡村 直美 221
アントニア・スーザン・バイアット『ゲーム』
1 沈黙と嘘 223
2 ゲームの意味——破壊から再生へ 231
3 女であることと芸術家であること 236

文献案内 8
索引 3

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

序　60年代・女が壊す

窪田　憲子

イギリスの女性作家のあゆみを考えるとき、一九六〇年代は、ある意味ではもっとも重要な年代であったといえるかもしれない。作家自身も、読者も、「新しい女性の小説」が生まれつつある、という明確な予兆を感じとることができた時代だからである。パトリシア・ウォーが「我々はいまだに六〇年代の収穫のなかに生きている」(*Harvest of the Sixties*) と述べるほどに、この年代は、大きな力をもっていたし、こと女性作家に限ってみると、六〇年代の意味は計り知れないものがある。

まず、当時をふり返ると、六〇年代は、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』の裁判、ビートルズの結成で幕を開けた。たまたま同じ一九六〇年に行われた、これらの出来事であるけれども、そこに時代の、ひとつの方向が浮かび上がってくるように思われる。というのも、貴族の奥方と森番との愛と性の表現が猥褻なのか、というロレンスの裁判は、階級意識まで含めた従来の価値観が問われるものであったし、ビートルズの誕生についても同様のことがいえるからである。

リヴァプール生まれの労働者階級出身の若者たちが、この年にビートルズという名前でグループの

活動を開始したことは、古いものを打ち壊し、新しい何かを求める若者のエネルギーが炸裂する、一九六〇年代を象徴している。彼らはこのあと一九六三年以降に爆発的な人気でもってアメリカ、日本のファンまでも熱狂的な渦のなかに巻き込んでいく。ジョン・ウィナーは、その著書『ジョン・レノンとその時代』において、ビートルズのメンバーのひとりであったジョン・レノンが、のちにアメリカの大統領選をも左右しかねないほどに、人びとを動かす力を有していると当局から恐れられ、当時のFBI長官であったフーバーに執拗にマークされたことをあきらかにしている。これなども、ビートルズの――そして彼らのファンたちの――背後にある、時代のエネルギーの一端を示しているといえよう。

イギリスでは第二次大戦後、「揺りかごから墓場まで」を合言葉に、福祉政策を実施し、公営住宅の建設にも力を入れ、失業率も低下したので、人びとのあいだに「ゆたかな社会」の到来という意識が生まれていた。五〇年代の保守党政権下では、イギリスのスエズ侵攻などにみられるように中東政策の失敗があったり、またイギリス経済が翳りを増していったりしたのに、五九年の選挙で保守党が圧勝し、労働党が大敗を喫した点に、人びとのあいだの「ゆたかな社会」信仰をみることができよう。だが、つとに指摘されるように、ゆたかな社会とはいえ、労働者階級と中流階級のあいだの溝は埋まるどころか、逆に広げられていった。六〇年代が幕を開けたとき、イギリスの社会は「ゆたかさ」の幻想に包まれてはいたが、経済が衰退をはじめ、人びとの鬱屈した不満、社会批判が渦巻いていたのであった。六〇年代後半に激しい学生運動が繰り広げられたのも、必然であったといえる。

そのような中で、第二波のフェミニズム運動（第一波は一九世紀後半から行われた女性参政権獲得の運動）が起こっていく。その原動力となったのは、アメリカのジャーナリストであるベティ・フリーダンが著わした『新しい女性の創造』という一冊の本である。一九六三年に出版されたこの書物は、当時のアメリカで「ゆたかな暮らし」を享受しているはずの家庭の主婦たちに、名付けられることのない、得体のしれない悩みが広がっていることをあきらかにした。女性が消費社会の中で「女らしさの神話」に縛られ、真の自己実現を果たすことが困難になっていることを、フリーダンは指摘する。この本は発売と同時にベストセラーになり、全米の多くの女性が、この書物を、自分自身の問題として捉えていったのである。六〇年代の後半には、「全米女性組織」をはじめ、無数の運動が組織され、女性の地位向上や、女性自身の意識の啓発がなされていく。

六〇年代のイギリスで、フェミニズム運動の理論的基盤になった書物としては、女性の抑圧の構造を分析した、ジュリエット・ミッチェルの「もっとも長い革命」（一九六六）という論文があげられよう。その後、ミッチェルは『精神分析とフェミニズム』（一九七四）を出版し、他にもイーヴァ・フィジェスの『家父長的態度』（一九七〇）など、多くのフェミニズムの著作が出版され、全英女性解放会議（一九七〇）が開催されたりしていく。このような具体的な運動や、目に見える成果は、主として一九七〇年代に入ってからであるが、六〇年代に女性たちの意識の覚醒が行われ、フェミニズムの機運が盛り上がっていったことは、注目に値する。

さらに、この時期の女性作家の活躍には目を見張るものがある。六〇年代に入ると、まるで堰を切

ったかのように、女性作家がつぎつぎと作品を生み出していく。この時代の特徴として、まず新しい作家の登場が挙げられよう。現在のイギリス小説の中核をなす作家の多くが六〇年代に活動を開始しているのである。しかも、本書でとりあげるドラブルの『夏の鳥かご』、バンクスの『L字型の部屋』、ルーベンスの『いがみあい』、オブライエンの『カントリー・ガール』は、いずれもすばらしい魅力を秘めた、作家の第一作目の小説なのである。他には、いまや文壇の重鎮バイアット（本書第9章）も、六〇年代前半から作家活動をはじめている。

ドラブルが『夏の鳥かご』を出したのは、ケンブリッジ大学を卒業後間もない頃であるが、スーザン・ヒル（本シリーズ70年代所収）は、まだロンドン大学在学中の一〇代のとき、最初の小説を出版している。一九六一年のことである。また、きらめく才気に満ちた作品を続々と生み出しながら、惜しくも、五〇代早々で世を去ったアンジェラ・カーターは、二〇代の半ばだった一九六六年に、最初の小説『シャドウ・ダンス』を出版している。フェミニズムを核として問題作を生みつづけたフェイ・ウェルドン（本シリーズ80年代所収）がはじめての小説『太った女の冗談』を世に問うたのも、八〇年代に過去の小説の読み替えを試みたリヴィジョン・ノヴェルで華々しい活躍をするエマ・テナントが最初の小説を出したのも、六〇年代のことである。

だが、注目すべきは、作家たちが新しく登場したことだけではない。新しい作家たちの作品それ自体が、それ以前から活動を続けていたレッシング、マードック、スパークなどともに、渦巻く奔流となって、堰を切り、流れ出し、六〇年代のイギリスの小説を創っていったのである。六〇年代の女性

作家たちにとって、まず緊急の課題としてあったのは、「女」という枠組みをどうとらえるのか、つまり、女の生とは何なのか、女性のセクシュアリティをどうとらえるのか、それをどう表現するのか、女性作家にとって「書く」とはいかなる営為であるのか、ということであった。

この問題は、必然的に、当時の既成概念と真っ向からぶつかることになる。五〇年代の後半において、男性作家たちが、いわゆる「怒れる若者たち」と呼ばれる、体制批判の文学を世に出したことは、よく知られている。しかし、女性作家をとりまく状況はというと、六〇年代になっても『タイムズ文芸付録』の書評欄で、「レディ・ノヴェリスト」（閨秀作家とでも訳したらよいだろうか）という言葉が、大手を振ってまかり通っているありさまであった。女性作家は、体制批判をするにも何をするにも、まず、従来の女の枠組みを壊していくことから始めなければならないことを認識したのだった。

たとえば、「フェミニストのバイブル」とも呼ばれ、現代小説の記念碑的作品であるドリス・レッシングの『黄金のノート』を例にとろう。これは、従来の知のありようまでも検証し、もろもろの体制に対する批判がなされている小説であるが、同時に「自由な女」とはどういうことか、その根底の意識まで掘り下げ、女の枠組みの解体をも意図した作品といえるのである。

また、一九六〇年に出版されたバンクスの『L字型の部屋』が未婚の母（シングル・マザー）をテーマにしていることは、六〇年代の幕開けを象徴的に示している。バンクスは、未婚の母という、おなじみの主題を扱いながら、従来の概念を打ち砕く新しい視点で、このテーマに取り組んでいる。この未婚の母の物語は、つづいてドラブルの『碾臼』（一九六五）に引き継がれていくのであるが、このようなテーマや、「母性」

を正面に据えた『パンプキン・イーター』の物語などは、当時の読者に大きな衝撃を与えた。二〇世紀の後半になってもなお人びとの心に淀む、ヴィクトリア時代的な女性の生き方の残滓を浮き上がらせ、それを打ち砕く力を有していたからである。

オブライエンの『カントリー・ガール』は、セクシュアリティの表現が露骨であることにより、当局から発禁処分を受けた。セクシュアリティをも含んだ、自己の生の状況に目覚めることは、女性はセクシュアリティを抑えるべきであるという世間の常識や、教会の理念と対立する。オブライエンが六〇年代に出版した小説が、ことごとくと言ってよいほどに発禁処分に付されたことは、その対立の激しさと同時に、オブライエンの作品自体のもつ破壊力の強さを表していよう。

さらに、リースの『サルガッソーの広い海』も注目したい。『ジェイン・エア』を狂女バーサの目から書き直したこの小説は、まさに八〇年代のリヴィジョン・ノヴェルや、ポストコロニアルの視点をもつものである。このように時代を先取りする見方が六〇年代に存在したのは、作者が女性の存在の周縁性という歴史の状況を認識していたことも無視できない要因であろう。

このことは、ルーベンスにも共通する。ユダヤ系作家という意識を核にもったルーベンスは、独自の視点で、家族の構図や、イギリスの社会に切り込んでいく。一方、一般におだやかな作家と思われているエリザベス・ハワードであるが、『ジュリアスにならって』において、カントリー・ハウスを舞台に、表層のストーリーに包まれて提示されるのが、男性優位の社会に対する鋭い批判である点はおもしろい。歴史に対する深い洞察をもつバイアットは、『ゲーム』において、姉妹の葛藤に絡めた

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com